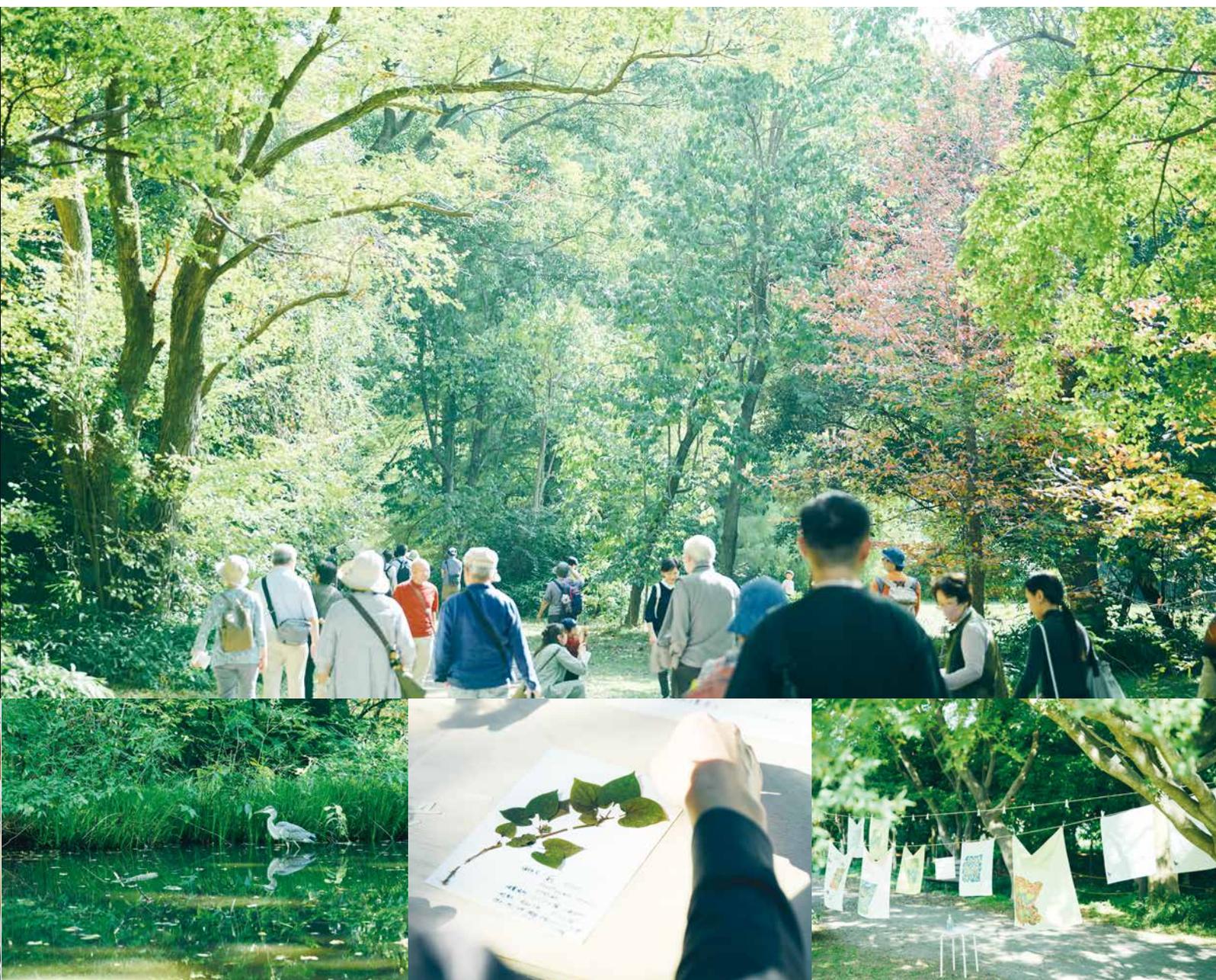


# KOISHIKAWA BOTANICAL FESTIVAL 2023

小石川植物祭2023 活動報告書



小石川植物祭

小石川植物祭は「植物」とまちについて考え  
植物、植物園、そしてまちや人のつながりに  
新たな価値を見出すための循環型のプロジェクトです。

300年以上にわたる歴史があり  
植物学の研究、教育の場として大きな役割を担い  
また地域の人たちの憩いの場としてもひらかれてきた  
小石川植物園の協力のもと  
地域のお店、企業、自治体、学校、住民が協働し  
さまざまな体験の循環をつくることを目指しています。



## VISION

「植物」と考える、まちのこれから。

The shape of the town with “plants”

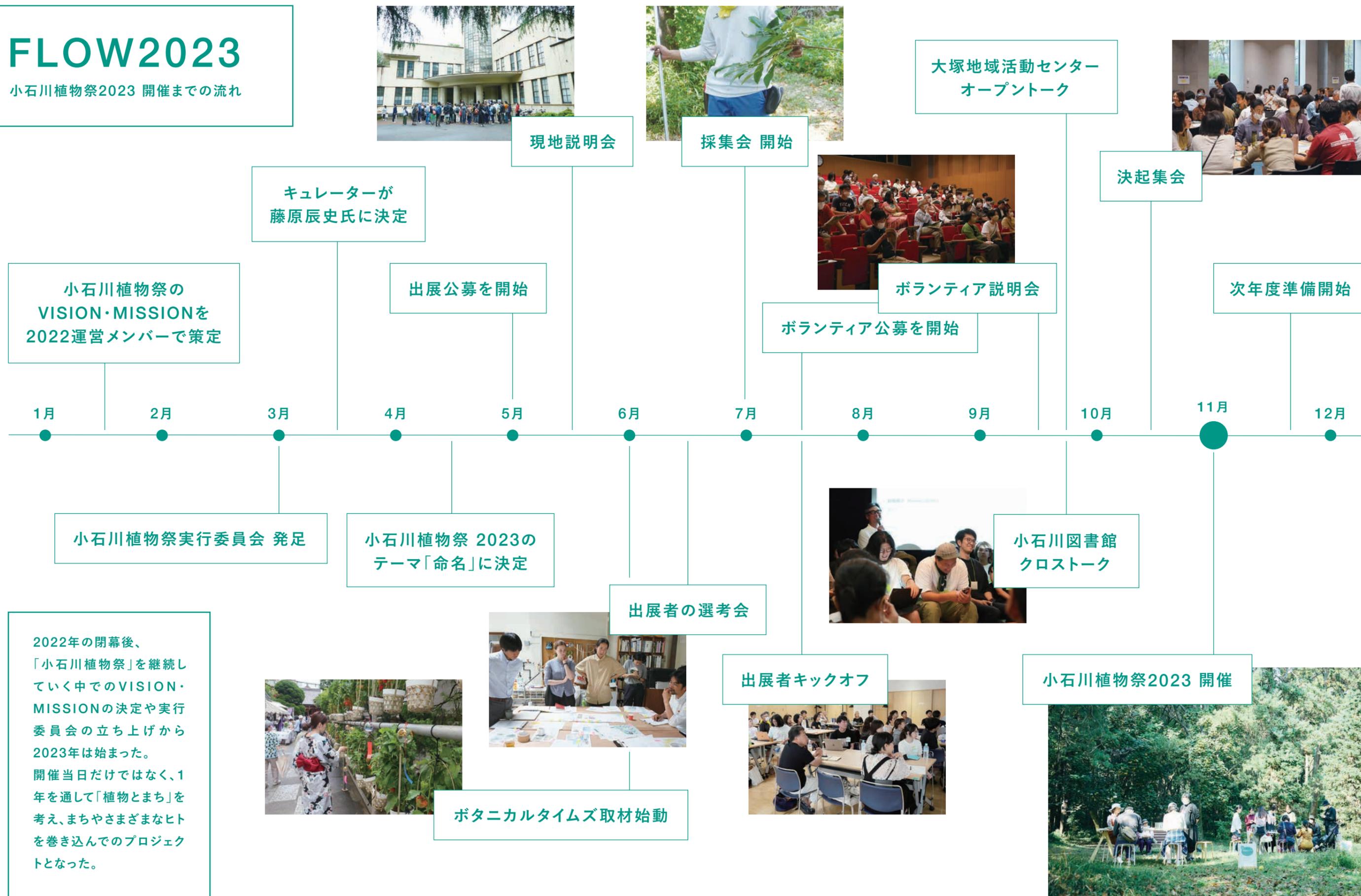
## MISSION

- 1 誰もが「植物」を学び、「植物」で学べる場をつくる**  
Create a place where everyone can learn about and from plants
- 2 世代や分野を越えて、人や地域をつなげる**  
Connect people and communities across generations and disciplines
- 3 まちの資源を発見し、新たな価値を創造する**  
Discover the city's resources and create new values



# FLOW2023

小石川植物祭2023 開催までの流れ



2022年の閉幕後、「小石川植物祭」を継続していく中でのVISION・MISSIONの決定や実行委員会の立ち上げから2023年は始まった。開催当日だけではなく、1年を通して「植物とまち」を考え、まちやさまざまなヒトを巻き込んでのプロジェクトとなった。





## 誰もが「植物」を学び、「植物」で学べる場をつくる

### 来場者 出展者 運営陣 地域住民 関わる全ての人々が学べる祭を1年かけて

小石川植物祭2023は、「命名～なぜ人は植物に名を授けるのか～」をテーマに、2023年11月3日から5日まで2022年と同じく小石川植物園を会場に、また周辺地域の各所で開催。藤原辰史(京都大学人文科学研究所准教授)をキュレーターに迎え、2022年に運営に携わっていたメンバーで実行委員会を発足し、新たなメンバーも加え実施した。

2022年から大きく変わった点といえば、まず、公募を広く募ったこと。昨年に比べ区外からの出展者が増え、展示内容の多様性が見られたが、地域との関係性が希薄となる側面もあったため、年間を通じて、地域住民との小さなイベントを実施するなど地域と連携を行う必要があると見られる。

次に、各々の立場を越えて関われる仕組みや機会(採集会や決起集会など)を意図的に増やしたこと(MISSION2参照)。

また、より来場者に植物に対する「学び」を能動的に取得してもらえるよう「学びのカード」を作成した。これは、出展者が使用した植物について小石川植物園

研究部の皆様に執筆いただいた解説などの情報が掲載されており、2022年の出展ブースに設置していたキャプションが元となっているが、2023年はカード式に変更し、来場者自らブースを回って収集し、最終的には、植物図鑑のような1冊となる。オペレーションには課題が残ったものの、評判が良く、アーカイブとして残していけることから、継続して次回以降も続けていきたい仕組みができた。

「命名」という難解なテーマだったが、出展者をはじめ、ボランティア・来場者 関わる全ての人々が向き合い、理解しようと務める姿が、1年を通して見られた。



## 2023 出展

出展者はキュレーター・植物園・主催が90組の公募から選出し、計20組の団体が出展した。

- 01 折戸朗子  
「小石川植物祭総選挙」
- 02 高橋瑠璃  
「知らない人を知らない理由」
- 03 MOM + I  
「We All Need Water -家族と過ごす日-」
- 04 崎尾均 + バストリオ  
「旅する木々の物語 + トレイル」
- 05 ときの忘れもの  
「牧野富太郎へのオマージュ」 並行して実店舗でも連動企画を開催
- 06 食堂コマニ + 麴中  
「土の旅 食と植の循環」
- 07 ねづくりや  
「「野草を食べる」のはじめての出会いを届ける」
- 08 Verde  
「植物ファミリーを知るための Plantal Gelato」
- 09 inagawa yakuzen  
「漢方と日々を支える植物を知る」
- 10 CRAFT COLA WAVE  
「小石川ボタニカルクラフトコーラ」 並行して文京区内の銭湯でも連動企画を開催
- 11 galleryKEIAN + みちくさあん + 武蔵野大学太田裕通研究室  
「くさときのなふだ」 並行して実店舗でも連動企画を開催
- 12 t.m.d. (友田菜月) + 山根有紀也  
「根っこのうつわ」
- 13 内田染工場 + ゼンバホノコ  
「イチョウの魅力を再発見！」
- 14 MIO flor  
「秋空花屋 2023」
- 15 ムジナの庭 + 小石川植物園環境整備チーム  
「触れる、香る、味わう植物園」
- 16 小石川植本屋 + Cotto  
「植物によむ物語」
- 17 文京ふるさと歴史館  
「先ず楮(の樹)より始めよ -将軍綱吉かく語りき-」
- 18 Dear Tree Project  
「まちのみどりとのいい関係」
- 19 印刷博物館  
「活版印刷 植物しおり」
- 20 小石川植物園  
「Open Air Talk Koishikawa」 「葉っぱカルタ」



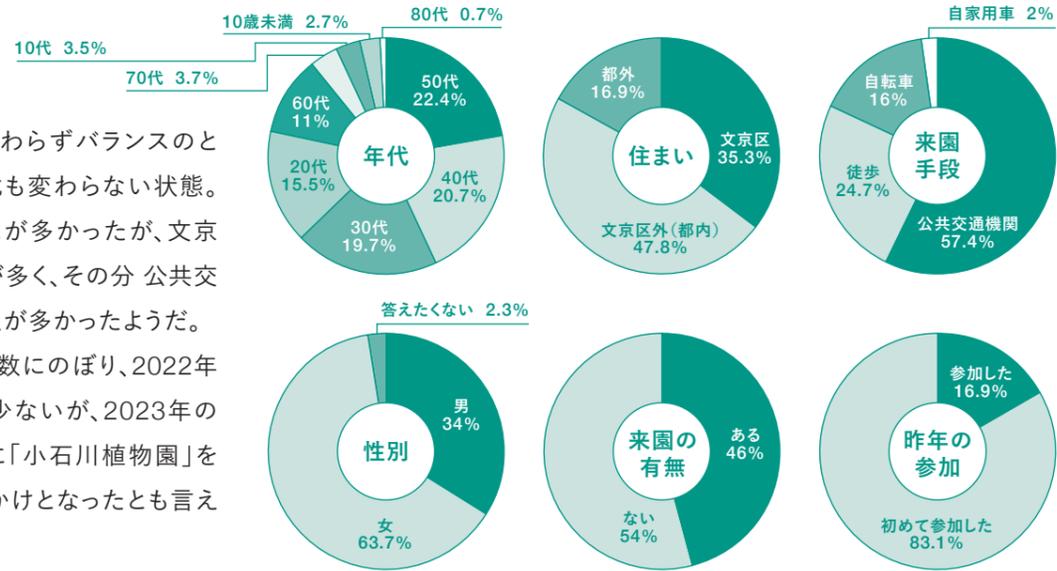
## 2023年 来場者の状況(アンケートより 402人回答)

### 来場者数と属性などについて

小石川植物園が朝ドラ「らんまん」の舞台となった影響も大きく、2022年を大幅に超える1.5倍ほどの来園者数となった。初日が最も多かった理由は、祝日で他イベントと併せて来場する人が多かったことが考えられる。また、年間パスの購入者が平日の4~7倍増えていることから、今後の植物園へのリピーターを期待できる。

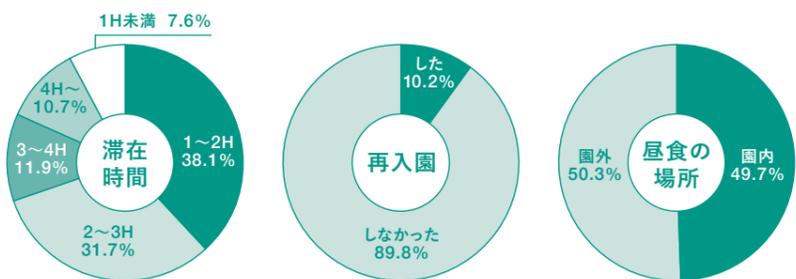
	一般	年パス(販売数)	一般団体	東大生	総入園者数	後援会
11.1(水)	344	133(13)	20	5	529	23
11.3(祝)	4,534	648(94)	33	24	5,239	151
11.4(土)	3,572	407(58)	80	27	4,086	133
11.5(日)	3,539	456(50)	23	18	4,036	118
当日合計	11,645	1,511(202)	136	69	13,361	402

年代は2022年と変わらずバランスのとれた年齢層。男女比も変わらない状態。2022年は文京区民が多かったが、文京区外からの来園者が多く、その分公共交通機関で来園する人が多かったようだ。また、初来園者が半数にのぼり、2023年の植物祭参加者も少ないが、2023年の植物祭をきっかけに「小石川植物園」を知り、足を運ぶきっかけとなったとも言える。



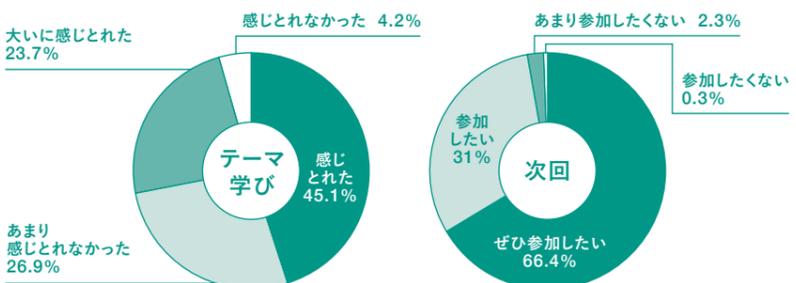
### 滞在について

2022年と変わらず、長期滞在の傾向。再入園者のみリストバンド制にしたが、こちらもそれほど変化はなかった。大きく変化があったのは昼食場所。前もって、昨年の来場者数などの目安数を出展者に伝えていたことにより、問題視されていた品切れは解消され、園内で食事をする来園者が多かった。



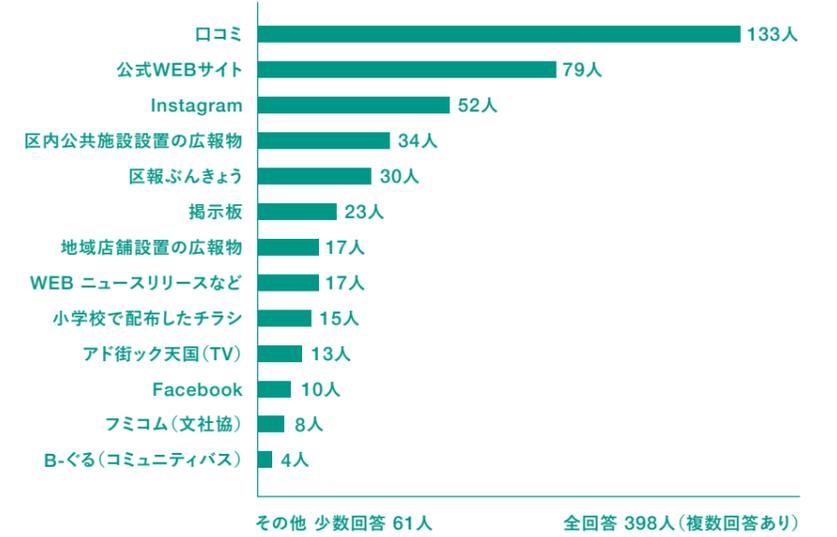
### テーマや学び・次回について

2023年より「命名」のテーマを定めた。約7割が「感じ取れた」「大いに感じとれた」とのことだが、今後継続するにあたっては課題としたい部分である。全体を通しては、97.4%が好意的評価をしている。



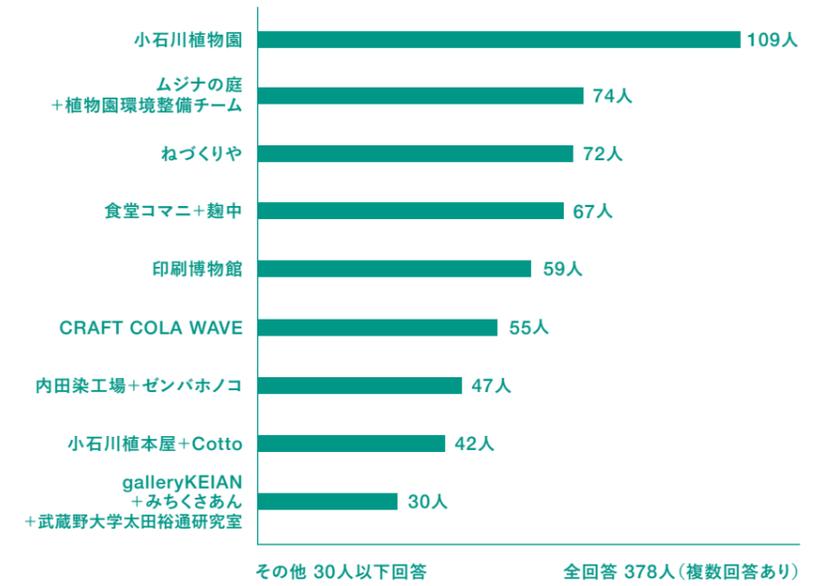
### 周知媒体について

知人からの口コミで来場した割合が圧倒的に多く、続いて公式WEBサイト・Instagramという結果だった。現状、協賛企業様にチラシやポスターを印刷していただいている中で、今後紙媒体の広報物の枚数を精査する必要がある。また、個々の感想では、WEBサイトなどの情報が分かりづらさや園にチラシが置いていないなどの声もあったため、地域住民や来場者にとってストレスにならない発信を心がけなければならない。



### 出展内容の印象や満足度について

印象に残った出展者は、2022年と同じく「小石川植物園」が1番回答数が多く、出入口から離れた「ムジナの庭+小石川植物園環境整備チーム」が続いた。これは、ブース位置と満足度は必ずしも比例しないことを示している。実際に、2022年より更にブース設置場所を拡大させたが密集する事もなく程よい賑わいと回遊性が生まれていた。また、30人以下の回答数の出展者については、人数制限があったワークショップや閲覧型アートなどが多く、個々の感想を見ると満足度が高い。



### 次回以降の課題と展望

- テーマ選びの段階で、ある程度 出展物や広報についても考慮しておく
- 広報や広告などを分かりやすく、ストレスのないように作成する  
また、タイムリーな告知を心がける
- 出展において予約制の場合は、知り合いで埋まらないように配慮する
- 「学びカード」をきっかけに、さらに来場者が能動的に集めたり学べるような仕掛けをつくる



## 世代や分野を越えて、人や地域をつなげる

### 採集会、クロストーク、決起集会…さまざまな人が「つながれる」機会を

小石川植物祭は、「祭」としての開催は3日間だが1年を通して、「まち」に関わるさまざまな人が学びや交流を重ね作り上げていくプロジェクトだ。1年目である2022年は、とにかく祭の運営に注力していたが、2023年では祭までのプロセスでより多くの人が関わり学べるような仕掛けを作った。採集会やオープントークやクロストーク、祭本番前の決起集会などを開催することで、ボランティアと出展者、小石川植物園、協賛企業の皆さま、行政、ファミコムなど立場や所属の垣根を越えて、意見を出し合い、協力し支え合い、「小石川植物祭2023」を作り上げていった。

また、周辺商店街や地域団体との連携も広がり、今後の展開の多様化にもつながったのではないだろうか(MISSION3参照)。

2023年では、ボランティアの皆さんが、より能動的にかつ年間を通して関わられるように、と実行委員会では考え、機会を設けた。しかし、なかなか上手く取り仕切ることが難しく、今後への課題が残った。

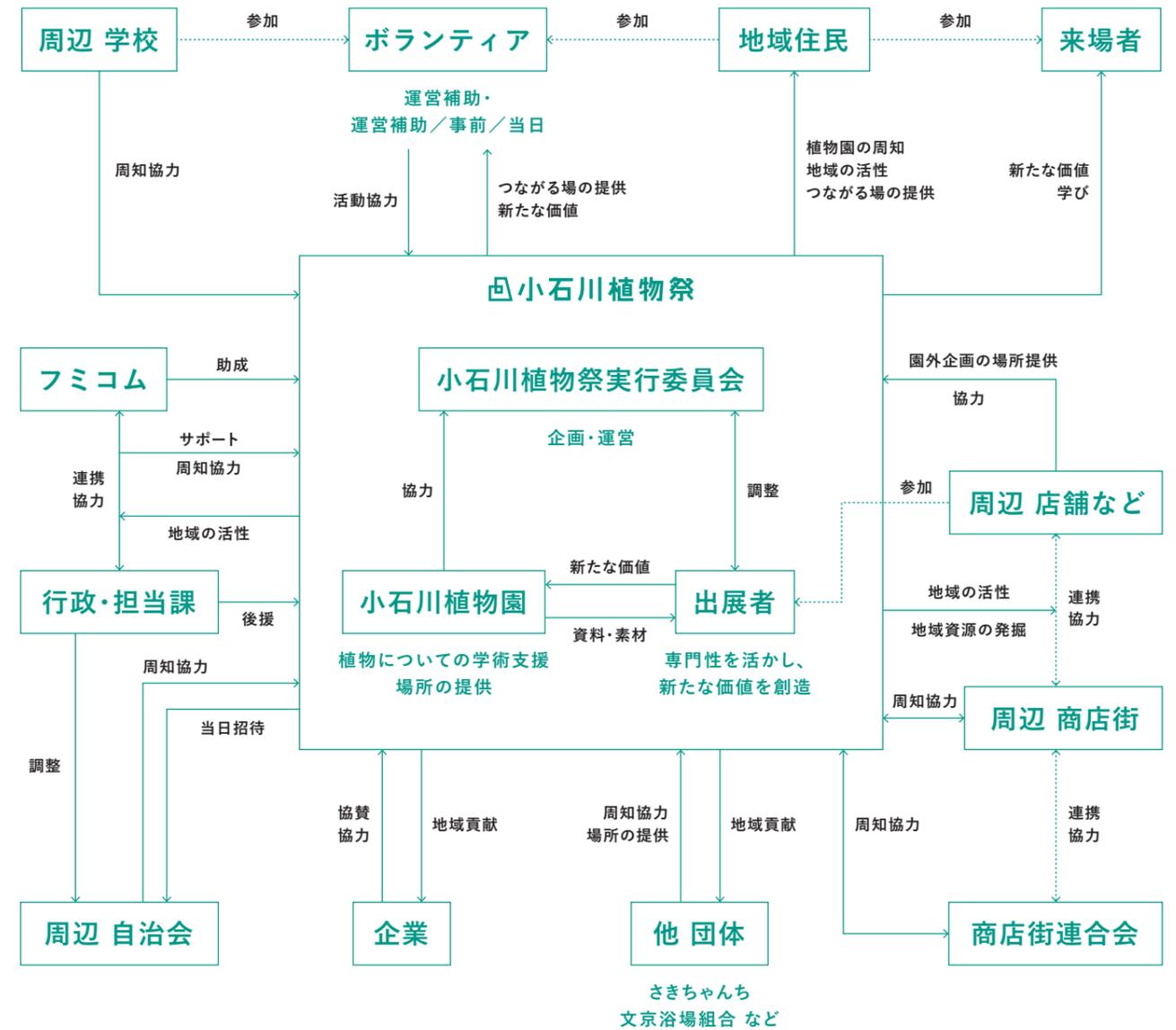
特に、運営補助ボランティアの皆さんには6月頃から関わっていただいていたが、組織や指示系統が上手く機能せず、加えて実行委員自体も運営について初めて体験することが多く、指示する側される側双方に混乱する事態が生まれていた。次回以降は、ある程度、工程をマニュアル化し、どの作業や段取りにどのくらいの人員と期間が必要かなど見繕った上で、依頼をかけることを心がけたい。

事前・当日ボランティアの皆さんに対しても同様だ。実行委員と直接コミュニケーションを取りづらい分、連絡事項の簡潔さや明確さ、タイミングが重要なことが分かった。

多様な人々が自然な形で「つながる」ためには、どんな世代や立場の人でも分かりやすく、無理せず前向きに参加できるようなプラットフォームを整備しなくてはならない。

次回以降は、皆がストレスなく関わられるような基本的な基盤づくりを徹底していく必要がある。

## 地域との協働相関図



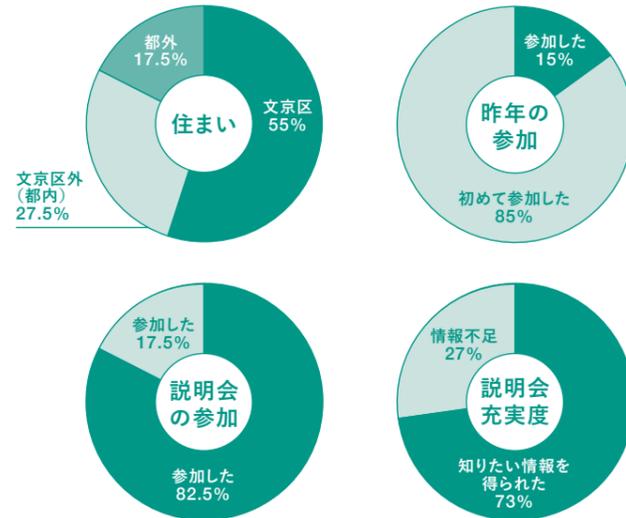
## 関わる全ての人々が、小石川植物祭の「VISION・MISSION」を共有できるプロジェクトに



## 2023年 ボランティアの状況(アンケートは41人回答)

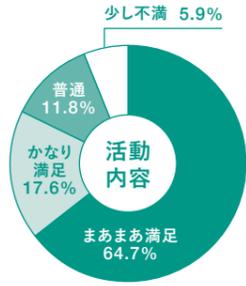
### ボランティアの属性・説明会について

文京区内からの参加者がほぼ半分を占めた。また、初参加者が85%にのぼった。2022年のノウハウを得ていない参加者が多かったため、戸惑う場面も多かったのではないかと推測する。説明会の参加率は高く、8割が参加。そのうち7割は情報について「得られた」と答え、「モチベーションが上がった」との回答が多かったものの、個々には「もっと早い時期に開催してほしい」「情報が明確化されていない」との声が上がった。



### 事前ボランティアについて

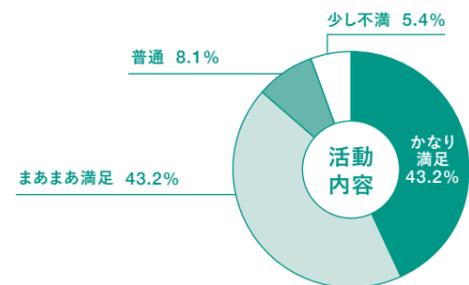
8割近くが「まあまあ満足」「かなり満足」と回答。事前ボランティアは、実行委員から直に指示を受けたり、コミュニケーションを取れる場面が多かったため、不安要素が取り除けたのではないかと考えられる。個々の回答は、参加したボランティアについての具体的な要望、意欲を感じるものが多かった。



### 開催当日のボランティア参加状況について

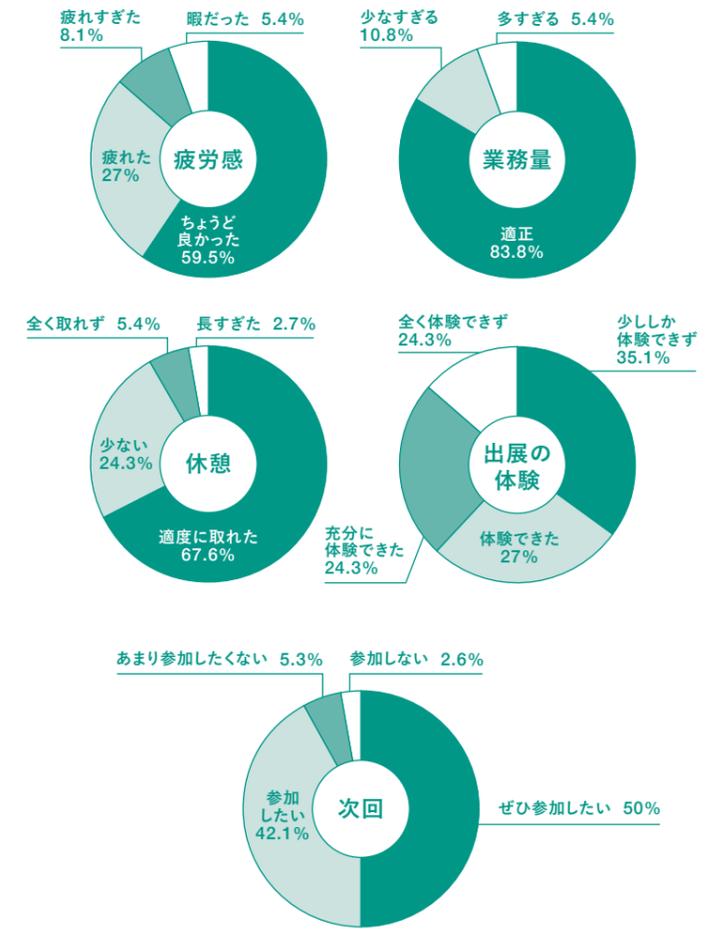
当日ボランティアの申込人数は、大人のみで十分な数だったものの、結果として実参加者数は半分以下となり、地域の中学校・高校の生徒が参加したことによって人数的なカバーが出来た。その反面、生徒のモチベーションにも個人差があるため、今後は学校からの申込ではなく、生徒個人から希望者を募る方が良いのではないかと声も上がっている。大人の実参加者率が低かった要因としては、実行委員会からの連絡の遅さや複雑さ、実行委員会の実体がボランティアには見えてこない、などの理由から申込から当日までの期間中、モチベーションを保てなかったのでは…と推測される。ただ、参加者の反応は、8割以上が「かなり満足」「まあまあ満足」と回答していることから、当日参加するまで、どう「自分ごと」として捉えてもらうかが重要と考えられる。

		応募者	実参加者(参加率)	22年不参加者
11.3(祝)	大人のみ	138	69(50%)	64
	生徒のみ	99	88(89%)	99
	全体	237	157(66%)	163
11.4(土)	大人のみ	106	33(31%)	29
	生徒のみ	0	0(0%)	0
	全体	106	33(31%)	29
11.5(日)	大人のみ	112	47(42%)	40
	生徒のみ	59	59(100%)	59
	全体	171	106(62%)	99



### 当日ボランティアの活動から

当日ボランティアの参加の感想について、疲労感や業務量は適正と答える回答が多いものの、「疲れすぎた」「暇だった」や「多すぎる」「少なすぎる」と真逆の回答が同程度あったため、役割によっては内容の見直しをする必要がある。また、休憩においても事前にボランティア・出展者へ必ず取るよう告知していたにもかかわらず、「全く取れず」がいたことは、運営側で休憩を取れる仕組みをつくる必要性を示している。出展物を体験できるかどうか休憩時間に大きく関わるため、次回以降への課題である。



### 振り返り会でのご意見

各々具体的なお意見はありつつ、特に印象的だったのがボランティア同士のスキルやポテンシャルを把握できるようにすべきという声。実際に、「得意ゼッケン」など用意はしていたが上手く反映できずにいたため、今後は活用できるようにしたい。また、事前につながったアイデアを昇華できるよう心がけたい。

### 次回以降の課題と展望

- ボランティア説明会の段階で、粗方の役割・内容を固めておき、告知しておく
- 連絡のやり取りの簡略化。誰もが分かるような方法でストレスなく情報を受け取れるように  
また、情報を与えることが後手にならないよう心がける
- 個々のポテンシャルややる気を生かせる人員配置を心がける
- 中・高校生の場合は、学校からの申し込みではなく、あくまで個人として申し込んでもらう
- 実行委員会の組織体制を明確にし、提示する。報告書はHPに記載する
- 「何を目的にボランティアに参加してくださったか？」の聞き取りを行う  
人とのつながりなのか、植物を学びたいのか、地域貢献の意識からなのか…  
ボランティア各々の目的やスキルによって、能動的に動けるような活動内容を複数用意する
- 終わった後のケア(ご意見や反省点の吸い取り、感謝の場を設けること)も必ず行う

## EPISODE 採集会

年齢や性別、立場を越えて、協力し合う  
植物の前では等しく、  
参加者みんなが学び合える時間に



小石川植物祭を開催するにあたり、出展者が出展物に用いる植物を採集・取材する機会を「採集会」と称し、7月から10月まで約月2回のペースで実施。出展者のほかは、実行委員と事前ボランティアが参加し、小石川植物園 育成部の皆さんに植物についてレクチャーを受けながら園内を巡った。

制作関係者の多い出展者と、地域住民の多いボランティアが「植物」という共通の話題のもと、コミュニケーションを取れる良い機会になったのではないだろうか。

出展者・ボランティア双方から、「採集会自体をイベント化できないか？」など大変評判がよかった反面、季節が夏だったため「時期をずらす、または季節満遍なく実施できないか？」との声も上がっていた。

植物園内での採集は、植物祭のために特別許可を得て行っているため、また園職員の皆さんの労力を考慮すると、今後も開催するのであれば、違った形式を取らなくてはならない。また、園内で行う場合は、植物の育成を第一に考え、さらなるルールの徹底化を義務付ける必要がある。

### TIME FLOW (例)

- 10:00 集合・受付
- 参加者の簡単な自己紹介
- 全員でルールの読み上げ・確認
- 各自植物園育成部の方の指示に従い採集開始
- 13:00 解散

7月以降、月2回の実施を行った。  
予め、植物園と実行委員会で日程を設定し、出展者にはSlack、ボランティアにはLINEオープンチャットで参加者を募集した。

### VOICE 出展者

全体を通したなかでも、採集会は植物園の皆さんや他の出展者の皆さんに色々なことを教えてもらい、とても楽しく有意義でした。一般の方に向けても何かツアーのような、そういった機会があったらいいのになと思いました。

### VOICE ボランティア

採集会では出展者の方々と話をする事ができ、楽しく活動ができました。

植物園での禁止、注意事項を守る事は、各出展者の方々は良くお分りのようでしたので、ボランティアとしては・出展者の方々がはぐれないように気を付ける・出展者の採集のお手伝い…が主な活動でした。

ただ採集に気を取られていると、全体の行動から遅れることもあり、先頭グループは必ず後のグループにも気を配る必要があります。また、はぐれた場合の連絡手段も行動前に伝えておくと良いと思います。

### VOICE 小石川植物園

採集会は特別許可を下ろしているため、そのためだけのイベント化などは厳しい。

職員の労力や時間の拘束はやはりある一定かかるため、最終的なやりがい(植物の使われ方)を向上させて欲しい。



### 次回以降の課題と展望

- 植物園内だけでなく、まちにある植物からも学べる機会をつくる
- 植物園の植物の知識は、学術的にも一般的にも、学べる形に落とし込む
- 植物の季節に合わせたスケジュールで行う
- 身体を動かしながら五感で学びを共有できる機会をつくる

## EPISODE 決起集会

### 出展者 × ボランティア 自分たちで植物祭を作り上げる実感を

2022年は出展者と運営のみで行った決起集会。  
2023年は当日補助していただくボランティアの皆さんも含めた参加型とした。午前中は小石川植物園や当日ボランティア本部になる「さきちゃんち」を巡りシュミレーション。午後からは出展者・出展物の紹介や出展者・ボランティア・協賛企業を絡めて、「オススメのルートを考える」ワークショップを行い、さまざまな意見を出し合い、当日までの士気を高めた。

### VOICE 出展者

事前に顔合わせした人の中に当日ブース担当のボランティアさんがいたり、そこであった美大生とつながりができたりなどの出会いがあったのはよかったです。  
ただ、拘束時間がそれなりに長く、出展準備に忙しい時期だったのもあり、稼働の負担は感じました。  
植物祭を自分たちの自治でやるんだという主体性にはつながったように思いました。もう少し早い時期に行き、その中で出たアイデアを実践することができてよかったですかもしれません。

### VOICE ボランティア

決起集会で、出展者の説明があったことで、イメージが予め理解でき、当日のワークショップでは自分達で盛り上げる意識が共有できたと思います。



### 次回以降の課題と展望

- 時期や拘束時間を見直し、負担がないよう、心がける
- ワークの内容や各々が出した意見を生かせるような仕組みづくりを考える

## EPISODE 植物祭2023 当日

### 今まで交わることのなかった人々が 植物祭を通して支え合う

当日は、突然の雨など小さなハプニングは生じつつも、出展者・ボランティア・実行委員会・関連団体など、各々が助け合い、無事閉幕することができた。出展者・ボランティアともにアンケートには具体的な感想が多く、意欲的に関わっていたことが分かった。

### VOICE 出展者

植物祭のコンセプト通り、出展者同士、ボランティアの方、来場者などたくさんの方との出会いがあり、皆でつくっていく面白さを感じました。当日ボランティアの方にはたいへん助けられ、皆さんのホスピタリティの高さに驚きました。

### VOICE ボランティア(担当:出展者補助)

とても勉強になりました。普段は関われない方々との交流や参加者の皆さまとの対話、ボランティアの大変さ、ひとつひとつが貴重な経験でした。本イベントで植物の名前を少しでも多く覚えなかったのも、それも達成できました。

### VOICE ボランティア(生徒・担当:巡回)

巡回ボランティアでゴミ拾いを行ったことで、植物園内だけでなく、普通の道端でも落とし物やゴミがないか確認しながら歩くようになりました。また、同じグループになった大人の方とも歩きながら出展や植物園内の様子について沢山話すことができ、親睦を深めることができました。

### 次回以降の課題と展望

- ある程度のハプニングは事前に予測し、準備しておく
- 各々が手持ち無沙汰にならぬよう、また一人に負担がかからないような人員配置を心がける





## まちの資源を発見し、新たな価値を創造する

### 小石川植物園や植物から広がっていく、まちの可能性

2023年、前年と比べ1番大きく変わったことは、小石川植物祭が小石川植物園から「まち」に広がり展開されたことだ。

植物祭に伴い、地域のギャラリーや銭湯で同時開催した企画が3つ。近くの書店や空き店舗では、関連のトークショーやカフェが開催された。

また、植物をきっかけとして地域の資源を見直し、発掘していくプロジェクト「BOTANIKAL TIMES」も立ち上がり、文京区内の各所を取材したり、区内施設の協力を得て植物に関する書籍や歴史を紹介する執筆も実行委員とボランティアで行い、今後WEBサイトで公開していく予定だ。

2023年の開催に際して、2022年の出展者や地域の店舗や商店街、団体の協力もあり、今後はさらに植物園だけでなく地域での展開を考えている。

「MISSION3」は、かねてから実行委員会メンバーが行いたかったことが多く詰まったミッションである。植物とともに、ヒトやまちをつなぎ、植物と関係する地域資源を掘り起こし、ヒトの暮らしを豊かにしてい

くことは、今後文京区だけでなく、各所でそこに暮らす人々が自分たちの生活と向かい合い、問い直すきっかけとなるのではないだろうか。

「祭」当日やそれに伴う活動だけでなく、日常的に植物やまちの資源と向き合い、各々の生活に展開していき、多くの人々に共有できるように。

今後はさらにまち、そして人々の暮らしに「小石川植物祭」を循環させていきたいと考える。



## 小石川植物祭 2023 園外企画

### ときの忘れもの

文京区内ギャラリー「ときの忘れもの」にて、牧野富太郎の植物図鑑にインスピレーションを受けた作品を展示。小石川植物祭園内でも総合ディレクターKASAが同時展示をし、小石川植物園と周辺地域をつなぐ役割を果たした。

#### 【出展作家】

大塚理司、佐藤研吾、杉山幸一郎、戸村茂樹、仁添まりな、藤江民、アレクサンドラ・コヴァレヴァ+佐藤敬(KASA)



### 文京区内 銭湯 × CRAFT COLA WAVE

小石川植物園近くの「白山湯」や「大黒湯」「ふくの湯」と、植物祭 出展者のCRAFT COLA WAVEがコラボレーション。小石川ボタニカルコーラの製造過程で生まれるシロップの絞り滓を銭湯に投入したお湯を楽しめる企画を同時開催。

小石川植物祭を楽しんだ後の疲れた身体を、植物やスパイスが醸す華やかで芳ばしいコーラの香りの湯で癒される人々も多かったよう。



### gallery KEIAN

小石川植物園近くの「gallery KEIAN」は園内出展だけでなく、ギャラリー本拠でも、植物祭の企画に沿った展示を開催。

こちらも、武蔵野大学太田裕通研究室とのコラボレーション作品を展示した。また、みちくさあん草履の展示に加え、作品の販売なども実施した。



## 関連トークイベント

### plateau books

小石川植物園近くの「plateau books」にて、キュレーター藤原辰史氏と総合ディレクターKASAとの特別対談を実施。

小石川植物祭2023を実際に巡り、出展を見た感想や意見をふまえて、植物やまち、ヒトとの関係を語り合った。

参加者からは質問や意見も多く、建設的かつ和やかなイベントとなった。



## BOTANICAL TIMES

### 植物をきっかけに まちの資源を再発掘していく

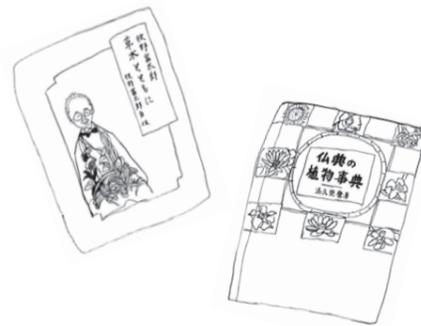
2023年では、11月の植物祭本番はもちろん、日常的に植物と地域との関係をより深掘りし、地域への理解を深めたいと考え、WEBサイト「BOTANICAL TIMES(ボタニカルタイムズ)」の立ち上げを企画。まちの方々に協力いただきながら取材を行った。

メンバーは実行委員メンバーと運営補助ボランティアメンバーの計4人。「大本山護国寺」を訪問して、担当の方のご案内で、寺の歴史や境内にある植物の紹介をしていただいた。7月に傳通院と源覚寺を中心としたエリアで行われた「文京朝顔・ほおずき市」も取材。植物が地域の人たちをつないでいる様子を知ることができた。こちらの取材では礒川地域活動センターの多大なお力添えをいただいた。このほか、メンバーおのおのも、区内の身近な地域で植物を育てている人にインタビューしたり、小説作品に出てくる路地を歩く中で植物がまちのシンボルであることを実感したりした。

小石川図書館の蔵書から、植物に関する本を紹介したブックレビューや、文京ふるさと歴史館から提供を受けた植物園に関する古写真を通じて歴史を紹介するコンテンツなどもそろえ、今後HPに掲載予定。

### VOICE 執筆ボランティア

植物に着目しながら街を歩くと、こんな場所にこんな木があったんだ、と新しい発見があったり、地域の人たちとの会話が生まれたりして楽しかった。



### 次回以降の課題と展望

- 今後、HPに掲載していく上で、どのような立ち位置でどう運営していくのか、無理なく、かつ定期的に更新していくにはどうすれば良いか、検討する
- 地域の皆さんや執筆ボランティアの皆さんのご協力を生かせるようなHPにしていく

## 地域からの各種協力(順不同)

### 共同印刷株式会社

2022年から引き続き、後夜祭や決起集会、振り返り会などの会場ご協力。小石川植物祭に関わるポスター・チラシ・当日の大型MAPなどの紙媒体の印刷ご協力。

### 文化シャッター株式会社

9月に実施したボランティア説明会の会場ご協力。

### エーザイ株式会社

当日来場者配布用の除菌シート、ボランティア配布用の飲料の物資ご協力。

### さきちゃんち運営委員会

当日のボランティア拠点として会場ご協力。

### 小石川図書館

出展者と地域住民を対象としたクロストークの実施。

小石川植物祭にまつわる書籍コーナーの設置など。

### 茗荷谷界隈プロジェクト

周知やその他多数のご協力。

### 株式会社ZMP

当日の歩行速ロボットの貸し出しご協力。

### フクダ電子株式会社

AEDの貸し出しご協力。

### ホーショー株式会社

「学びカード」の印刷や企画相談などのご協力。

### 株式会社竹尾

「学びカード」表紙用 用紙提供のご協力。

### 文京浴場組合

園外企画会場や周知のご協力。

### 文京区商店街連合会・周辺商店街

周知のご協力。

### 大原地区町会連合会・礒川地区町会連合会

周知のご協力。

その他、たくさんの団体・個人の皆様に、さまざまご協力を賜りました。深く御礼申し上げます。





## 決算報告

収入		支出	
助成金(提案公募型協働事業Bチャレ)	1,000,000	作品制作費	300,000
協賛金	2,050,000	運営人件費	1,320,000
出展料(有料販売のみ)	130,000	会場構成費・設営費	585,465
公式グッズ売上	414,500	旅費・交通費	58,100
寄付金(募金)	129,478	通信費	5,230
繰越金	108,692	宣伝費	1,080,000
その他 預金利息	18	印刷費	198,098
		グッズ制作費	134,200
		振込手数料	9,735
収入合計	3,832,688	支出合計	3,690,828
		繰越金	141,860

### 協賛金・寄付金の御礼

多くの企業様や団体様、皆様から貴重な協賛金やご寄付を賜わり誠にありがとうございました。ここに、厚く御礼を申し上げます。

いただきました協賛金につきましては、小石川植物祭2023の運営費として、使わせていただきました。また、開催当日にご寄付いただきました募金の一部につきましては、今後の小石川植物祭運営のため使用させていただきます。

### 協賛いただいた企業様・皆様

共同印刷株式会社

文化シャッター株式会社

エーザイ株式会社

株式会社 太田胃散

株式会社 図書館流通センター

株式会社 INA新建築研究所

三菱食品株式会社

茗荷谷界隈プロジェクト

有限会社 三宮印刷

今井 順子 様

フクダ電子東京販売株式会社

实用ライフサポート有限会社

株式会社 甲文堂

### 協賛のお願い

小石川植物祭実行委員会では、「小石川植物祭」を応援していただける企業や団体の皆さまからのご協賛を募集しております。「小石川植物祭」の趣旨にご理解・ご賛同を賜り、協賛をお寄せいただける方は、[koishikawabotanicalfestival@gmail.com](mailto:koishikawabotanicalfestival@gmail.com)へお問合せください。

## 運営

### 小石川植物祭実行委員会

■総合ディレクション:アレクサンドラ・コヴァレヴァ+佐藤敬 (KASA/KOVALEVA AND SATO ARCHITECTS) ■キュレーション:藤原辰史 ■取材・ライティング:松井美季 ■グラフィックデザイン:高田康代(めぐるデザイン)・高田翔太 ■編集:西山萌 ■Webサイトデザイン・映像・写真:大島賢一(Arki Co.Ltd.) ■協賛担当:塩田玲子 ■出展者マネージメント:三柴幸枝 ■ボランティア統括:島田浩司 ■PR:西山萌・小早川愛(株式会社HERBiS) ■メインビジュアルイラスト:高田康代 ■会場構成:村瀬唯・中井由梨

### 協力

### 後援

### 助成

東京大学大学院理学系研究科附属植物園

文京区・文京社会福祉士会

文京区社会福祉協議会Bチャレ

## SPECIAL THANKS

ボランティアスタッフの皆さん さきちゃんち運営委員会 文京区立小石川図書館 文京区商店街連合会 大原地区町会連合会 礪川地区町会連合会 ホーショー株式会社 株式会社竹尾 文京浴場組合 株式会社ZMP 稲富滋 新井友梨(画家) 三宅ひづる(コピーライター) 木村好見(デザイナー) 保田敬介(カメラマン/Arki Co.Ltd.) (順不同)

## 発行

小石川植物祭実行委員会

E-mail : [koishikawabotanicalfestival@gmail.com](mailto:koishikawabotanicalfestival@gmail.com)

Photos : 保田敬介(Arki Co.Ltd.) ※一部除く

Design : 高田康代(めぐるデザイン)

Illustration : 三柴幸枝



